

「死即生」の構造と善悪の問題

岡野 利津子 学習院西田幾多郎博士記念館*

Affirmation through Contradiction and the Problem of Good and Evil

OKANO Ritsuko

自己の変容には、それまでの自己のあり方をなくす（手放す、離れる、捨てる）という契機が含まれている。西田幾多郎（1870-1945年）はこのプロセスの全体を「死即生」、あるいは「自己否定即自己肯定」といった言葉で表現している。このような意識の変化の自覚は、宗教的な体験において劇的に強烈なものとして経験されるが、西田は我々の日常における各瞬間にこの構造を見ている。〈無〉を介さなくては、いかなる変化も不可能であり、とりわけ不都合な事実や、思惑通りにならない他者の存在を受容していくには、自己が〈無〉となることを介するという「死即生/自己否定即自己肯定」の構造が人間の精神に必要となる。また、自己が成長していくには、自己が自己を見直し修正するという「自己否定」が、必要に応じて行われなければならない。つまり、転換が大きなものであれば劇的な変容体験となるが、小さな変化や気づき、成長をもたらしているのも「死即生/自己否定即自己肯定」という精神の在り方なのである。日常生活において精神の柔軟性や他者との真の愛情関係、物事の客観的認識等が成り立つのは、半ば無意識的なものとしても、人間の精神に「死即生/自己否定即自己肯定」の構造があるからである。逆に、これが機

能不全に陥る時、精神の健全性は損なわれ、他者との関係にも支障をきたし、事実の認識にも歪みが生じる。本稿では、その端的な例として、ドメスティック・バイオレンス（DV）、モラル・ハラスメント、ストーキング等、諸々のハラスメントや男女間の暴力を取り上げ、それらの加害者たちに共通して見られる特異性に着目する。また、こうした影響を受けている被害者の精神状態についても、この観点からの考察を試みたい。

1. 西田哲学における「死即生」

(1) 西田『善の研究』における主客未分の「純粹経験」

西田が『善の研究』（1911年）で立脚した「純粹経験」の考えには、後の西田哲学全体に亘る思想が萌芽的、潜在的に含まれていると言える。西田の言う「純粹経験」とは「主客未分」の経験であり、「毫も思慮分別を加へない、真に経験其儘の状態」（一・9）である。そこにおいては「事実其儘の現在意識あるのみ」であり、「未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一して居る」（*ibid.*）。「我々が物を知るといふことは、自己が物と一致するといふにすぎない。花を見たときは即ち自己が花となって居るのである。花を研究して其本性を明

* hrokano@yahoo.co.jp
学習院西田幾多郎博士記念館
〒248-0024 神奈川県鎌倉市稲村が崎3丁目11-1

にするといふは、自己の主観的臆断をすてて、花其物の本性に一致するの意である」(一・76)。

学者や芸術家の「知的直観」もまた「純粹経験」であり、日常の「純粹経験」の状態を一層深く大きくしたものである。「知的直観」もまた「主客合一、知意融合の状態」、「主客を超越した状態」(一・35)であり、そこにおいては「物我相忘じ、物が我を動かすのでも、我が物を動かすのでもない、たゞ一の世界、一の光景あるのみ」(ibid.)である。芸術における神来のインスピレーションは、こうした境地に達したものである¹。

西田はまた、「真の善行」というものについても、同様の仕方で論じている。「主客相没し物我相忘れ天地唯一実在の活動のみなるに至つて、甫めて善行の極致に達するのである」(一・125)。西田によれば、「宗教道德美術の極意」とは次のようなものである。

「実地上真の善とはただ一つあるのみである、即ち真の自己を知るといふに尽きて居る。我々の真の自己は宇宙の本体である、真の自己を知れば常に人類一般の善と合するばかりでなく、宇宙の本体と融合し神意と冥合するのである。宗教も道德も實にここに尽きて居る。而して真の自己を知り神と合する法は、ただ主客合一の力を自得するにあるのみである。而して此力を得るのは我々のこの偽我を殺し尽くして一たび此世の慾より死して後蘇るのである。[...]此の如くにして始めて真に主客合一の境に到ることができる。これが宗教道德美術の極意である。基督教ではこれを再生といい仏教ではこれを見性という」(一・134)。

「主客合一」に至るには、「この偽我を殺し尽くして、後蘇る」のでなければならぬ。「我」が対象と、あるいは神と一つになるには、「我」

というものがなくなる、「無」となるのではなくてはならない²。西田はこうした宗教体験を、「既にわれ生けるにあらざ基督我にありて生けるなり」(一・135; cf. 125) というパウロの言葉(ガラテヤ書, 2, 20)を引用して説明している。

(2) 「死即生」「自己否定即自己肯定」

上述のように、「この偽我を殺し尽く」した後、我々の自己は再生し、神なり対象なりに即した働きを行うようになる。この構造は『無の自覚的限定』(1932年、全集、第五卷)においては、「絶対の死即生」、あるいは「自己否定即自己肯定」という表現で述べられている。しかし、ちょうど「純粹経験」が宗教体験に限られず、基本的には「事実其儘の現在意識」であったように、これも西田哲学においては、宗教的体験においてのみ見られるものではない。勿論、宗教的な体験においては、この過程が顕著であり、体験者に劇的に自覚されるのであるが、たとえ無意識的なものであっても、これが我々の日常的な自己を成立させている構造なのである。西田によれば、「我々はいつも我々の底に死即生たる絶対面に接して居るのである」(五・282-283)。

① 自己の「人格的統一」とその「自由」

西田によれば、我々の自己は「絶対現在」の瞬間的自己限定として³、いつも「死即生」的に、自由に自己を変ざることができる。「我々の自己は一歩一歩が絶対に自由にして、絶対の無に触れていると考へられると共に、死即生として一つの人格的統一と考へられる」(五・250)。

我々の自己とは「種々なる作用の総合点」(二・227)である。我々がある作用から別の作用へと自由に移行することができるのは、我々に自由意志があるからだ、が、「意志的自己に於ては、自己が自己の内から自己を否定することによつて他となると共に、自己が真の自己となるのである」(五・257)。我々の自己が常に活

動し、ある作用から別の作用へと移り行くのは、その都度直前までの自己の在り方を否定し新たなものへ移行することによってである。そして、互いに異なる種々の作用を総合してゆくところに「人格的統一」がある。「一々の瞬間に於て私が絶対自由として、他の瞬間に於ける私を絶対自由と見做すことによつて、私の人格的統一といふものが成立するのである、即ち非連続の連続として人格といふものが成立するのである」（五・249）。「非連続の連続」というのは、「自己否定」を介してその都度の自己のあり方が限定されることであり、言い換えれば「自己否定即自己肯定」である。

自由というのは、囚われないということである。一步一步が「死即生」、「自己否定即自己肯定」として、我々は常に自己を作り変えていくことができる。そして、それが生きているということでもある。「真の生命といふべきものは[...]非連続の連続でなければならぬ。死して生れるといふことでなければならぬ。生命の飛躍は断続的でなければならぬ」（五・278-279）。

②他者との関係

西田によれば、「私」と「汝」との関係も「絶対の否定を通じて相結合する」（五・8）ものであり、「非連続の連続」である。「私と汝とは絶対に他なるもの」であり（五・297）、自己と他者とが直に一体となることはできない（五・305, 307, 311）。「絶対の他」というのは「絶対に自己自身を否定するもの」（五・313）だと西田は言う。他者との関係においては、相手を思い通りにしようとする自己、あるいは相手を自分の想像通りの人間とみなす自己は、否定されることになる。

互いに「絶対の他」である「私」と「汝」との関係は、互いの自己否定を介して相応ずるものとして成立する。「私と汝とは絶対の否定によつて媒介せられてあると考へられねばならぬ」（五・291）。つまり、人格的自己としての

「私」と「汝」との結合を成り立たせるのは、「死即生」という構造である。「一つの人格と人格とは絶対の無を隔てて相対するのである、絶対の死即生なるものが私と汝とを相結合するのである」（五・256）。「私」と「汝」との関係は、互いに己を無にするところを介して応答し合うというものではない⁴。

逆に言えば、自己否定をしないまま相手と直に一体となろうとするのは、相手の他者性を否定し、自己の所有するところにしようすることである。

③事実認識を可能にするもの

更に、我々が事実を事実として認識できるのも、「死即生/自己否定即自己肯定」の構造によってである。「我々は現実の底にいつも絶対の死、即ち絶対に非合理的なものに触れている。そこでは事実が事実自身を限定し、我々は感官的として唯、之を映すと云うことができる」（五・282-283）。「映すといふことは物の形を歪めないで、その儘に成り立たしめることである、その儘に受け入れることである」（三・429）。我々は、「真に自己を空しうすることによつて、対象をありのままに映す」（三・425）。これが事実をありのままの事実として認識することである。「無にして見るものの自己限定として事実なるものが見られる」（五・88）。我々が事実をありのままの事実として受け取ることができるのは、「無にして見る自己の自己限定」によってである。でなければ、そこで捉えられているのは我々の主観による思い込みでしかなくなる。客観的知識の成立は、「無にして見る自己の自己限定」として、「事実が事実自身を限定する」ことにより可能となる（五・6, 55, 111, 112, 127）。このようにして、知覚的なものであれ、判断的なものであれ、宗教的なものであれ、事実がありのままの事実として認識される⁵（cf. 五・88, 89）。一般に真実の把握が可能となるのは、このような仕方によつ

てであろう。

更に、「事実が事実自身を限定する所」に、我々の自己も成立する。事実の認識に応じて、我々の言動や、生き方や、世界観は変じていくのであり、「事実」というのは、「我々の自己がそこから成立する」ところのものである（九・382）⁶。我々の真なる自己の成立には、事実についての真正な認識が必要であり、「己を空しうして自己を世界の中に置く」（九・175）、「自己の主観を棄てて真の現実となつて働く」（ibid.）⁷という「死即生/自己否定即自己肯定」により、我々は真の自己を生きることができる。

（3）自己の基底としての「死即生/自己否定即自己肯定」

したがって、西田における「死即生/自己否定即自己肯定」という構造は、我々の精神の自由や、他者との関係や、客観的知識の成立において、その根底を成して、それらを可能にしている構造だと言える。即ち、「死即生/自己否定即自己肯定」というあり方こそ、現実のこの世界⁸における我々の自己を成り立たせている基底である。

そして、「自己否定」の契機となるのが、現実の事実や他者の存在である。それらは我々の知識、考え、予想、ひいては世界観や人生観といったものに修正を迫ってくるものである。たとえ受け入れ難くても認めざるを得ないのが「事実」や、他者が突き付けてくる現実というものであり、それらにより我々の認識、思想、世界観、人生観といったものは絶えず修正され、より広く、深く、真なるものとなっていく。そして、それに応じて我々の自己のあり方も変じていく。この過程において起こっているのが、「死即生/自己否定即自己肯定」である。つまり、「死即生/自己否定即自己肯定」のプロセスによって、自己とその世界観とが絶えず再構成されていくのが人間の生なのである。自

分に不都合な事実を一切見ないとしたら、それは偽りの幻想の世界の住人になるということだと言わなくてはならない。

（4）「死即生/自己否定即自己肯定」の停止としての精神の死物化

「真の生命といふものは、内に絶対の無を含んだものでなければならぬ、絶対否定を含んだものでなければならぬ」（八・60）。即ち、現実の事実や他者の存在との関係において、自己自身の「内」から「自己否定」が起こり、異なるものへと移っていくことができるのが、真の生命である。逆に言えば、決して「自己否定」ができず、「死即生/自己否定即自己肯定」という精神の運動が停止してしまうのは、精神の死物化である⁹。

2. 「死即生/自己否定即自己肯定」の停止として邪悪性

「死即生/自己否定即自己肯定」の働きが停止する時、我々の自己のあり方にも、他者との関係にも、認識の客観性にも支障が生じる。我々の自己が徹底して「自己否定」を拒絶することは、自己に直面してくる他者の存在や現実の事実の方を否定し、歪め、破壊しようとするということである。事実を事実として見ないという＜事実の拒絶＞は、「自己否定」の拒絶であるが、それはかえって自己の健全性を損なうことでもある。

現今の社会における諸々のハラスメントや男女間の暴力の問題も、加害者における「自己否定」の拒絶、そして「自己否定即自己肯定」の機能不全として捉えることができる。ドメスティック・バイオレンス（DV）やモラル・ハラスメント、悪質なストーキングの加害者たちにはしばしば自己愛的な精神構造が見られ¹⁰、彼らに思考の歪みがあることは、それぞれの分

野の専門家たちによって繰り返し指摘されている。その思考の歪みは、自己認識と他者認識、事実認識に亘るものである。

更に、これらの被害が激しい場合、被害者の精神においても自己のこの基礎構造が傷付けられることになり、そこに被害の深刻さというものも見て取ることができる。被害者たちは事実と反する「否定」にあい、それと葛藤することになり膨大な精神力と時間とを費やすことになり、正常な「自己否定即自己肯定」から遠ざけられてしまっている。

（１）DV加害者における特権意識と認識の歪み

ドメスティック・バイオレンス（DV）の暴力には、身体的なもの、精神的なもの、経済的なもの、性的なものがある。バンクロフトによれば、DVを引き起こしている原因は、加害者の特権意識や所有意識で、加害者には思考の歪みがある。特権意識とは、自分が特別な地位にあって、相手には適用されない権利や免除が自分だけにあるという考え方である（Bancroft 2002, p. 54）。DV加害者は相手を軽んじ、自分の方が優れていると思っている（*ibid.* pp. 62-64）。自分は正しいと考えており、上手いかわからないことは、すべて相手のせいにする。加害者は、物事を正反対に捻じ曲げてしまう。自分の暴力についての責任も相手に転嫁し、相手が自分を怒らせるとか、相手が自分に虐待的な行動を取らせていると信じている（*ibid.* pp. 70-71）。また、少なくともパートナーにそのように思わせることによって、自分自身と向き合わずに済むようにしている（Bancroft 2002, pp. 18-19）¹¹。相手に対して「操作的（manipulative）」であり、被害者が自分自身を責めるように仕向ける（*ibid.* pp. 65-67）（たとえば「自分が相手を怒らせたい」「傷付けたい」「私にも悪いところがある」等）。その一方で加害者は、自ら

の行為については正当化や否認を行う（*ibid.* pp. 70-73）。自分がしていることを直視させられそうになると、反撃的な態度に出ることもある（*ibid.* p. 58）。自分のコントロールに対して被害者が抵抗すると、復讐のために被害者を罰する（*ibid.* p. 54）。加害者における責任転嫁、自己正当化および加害行為の否認は、「自己否定即自己肯定」という観点から言えば、「自己否定」の拒絶である。

加害者は二人の関係を終わらせる権利を自分だけに認めており、相手には認めない（*ibid.* p. 217）。殺人や殺人未遂の危険が特に高いのは、被害に遭っている女性が別れていこうとするときである（*ibid.* p. 219）。DV加害者が相手からの拒絶を受け入れず、ストーカーとなる場合は、極めて危険である（守山 2019, p. 280; 小早川 2017, p. 57）。

（２）「自己愛的な変質者」としてのモラル・ハラスメント加害者

モラル・ハラスメントは精神的な暴力であるが、ここでは提唱者であるイルゴイエンスの説に従って述べる。DV加害者に見られる<支配>、<事実の歪曲>、<歪んだコミュニケーション>、<操作的であること>、<貶め>、<責任転嫁>、<自己正当化>、<虐待の否認>、<被害者意識>などは「モラル・ハラスメント」の加害者にも当てはまる（cf. Hirigoyen 1998, chs. 3-5）。ただしDVと違い、イルゴイエンスの「モラル・ハラスメント」においては、「加害者が苛立ったり、感情を爆発させたりする時に敵意が現われるのではない。[...]それは怒りの口調においてではなく、明白な事実を述べるかのような冷たい口調で表現される」（*ibid.* p. 120）。「ただ冷淡で意地悪」（*ibid.* p. 6）なのが、モラル・ハラスメントの特徴の一つである。「モラル・ハラスメント」には家庭内のものもあるが職場のものもあり、加害者の特異

性や攻撃の仕方は家庭内の場合と同様である¹²。

モラル・ハラスメントを受けているうちに、被害者は正常な自己感覚を喪失してゆく (Hirigoyen 2004, pp. 142-143)。加害者は仄めかしや当て擦り、言外の意味をもたせた言葉遣い、二重の意味のある態度、冗談、嘘や言い逃れ、直接のコミュニケーションの回避といった方法を用いるので、被害者は相手の意図を特定することができず、混乱に陥り、自分のどこが悪いのか、自信がなくなる (cf. Hirigoyen 1998, ch. 4)。被害者が抵抗するようになると、加害者による侮辱や嘲弄、悪口といった言葉の暴力が破壊的なレベルにエスカレートするが、被害者が傷付いたり加害者の挑発に乗ったりして感情的になれば、被害者の方が精神や性格に問題があるといった話にされる。加害者は被害者の自己イメージを低下させることに満足を感じている (cf. *ibid.* ch. 5)。イルゴイエンヌによれば、モラル・ハラスメントが辿る経過の特異性は、被害者が非難されているとおりの状態に実際になっていくことである。たとえば「無能だ」と言われていけば、被害者はどうして良いのか分からなくなり、本当に無能になった気がしてくるし、「妄想症」扱いされていけば、実際に警戒心が強く、疑り深くなる (Hirigoyen 2004, p. 149)。こうした心理的な戦いの中で、被害者は自分の実体を失い、自分自身の目から見てもいかなる価値もない人間になってしまうが、これは加害者の目から見ても同じであり、男女関係ではそうなる、もはや失っても惜しくない存在として、加害者は被害者を投げ捨ててしまう (Hirigoyen 1998, p. 157)。

イルゴイエンヌがモラル・ハラスメントの加害者とするのは、「自己愛的な変質者 (perverse narcissique)」で、自己愛性パーソナリティ障害の規定が、これに近いと言う (*ibid.* pp. 128-129)¹³。自己愛的な人間は、相手との関係が近くなり過ぎると、相手から侵入されはしないか

という恐怖を感じるため、相手の存在が自分にとって危険でなくなるように、相手を支配し所有しようとする (*ibid.* p. 18)。「自己愛的な変質者」には妄想症 (パラノイア) との類似もあり、自分が耐えられないものをすべて被害者に投影することによって、自分は不安から逃れる (*ibid.* p.137)。投影 (projection) のメカニズムによって自己を防衛し、うまくいかない事の責任をすべて他者のせいにし、内心の葛藤から目を背ける (*ibid.* pp. 7, 135)。つまり、他者に対する攻撃は、苦悩や苦痛、抑鬱を避けるための方策である (*ibid.* p. 136)¹⁴。加害者の心理の根底にあるのは妬みの感情 (envie) であり、それは最終的には相手を破壊することに向かう (*ibid.* pp. 133-135)。

(3) ストーカーにおけるナルシズムと認識の歪み

ミュレン、パテ、パーセルによれば、元パートナーを対象とする「拒絶型ストーカー (rejected stalker)」¹⁵は、しばしば自己正当性と極度の特権意識が組み合わさった感情に満たされているが、どちらの心的状態も、脅しや暴力行為に結び付きやすい (Mullen, Pathé and Purcell 2009, p. 76)。とりわけ「相手からの拒絶は、人格的な侮辱として経験され、ナルシズムが傷つくことになった責任を負わされている相手をつけ回す行為を、強力で正当化している」(*ibid.* p. 272)。すなわち、相手から否定されることによるナルシズムの傷つきが、相手に対する激怒となり、相手の価値を貶め、後をつけ回し、傷つけ、損害を与え、思いのままにし、ダメージを与え、破滅させるという行為に駆り立てるのである (*ibid.* p. 70)。

既知であれ、見知らぬ他人であれ、交際関係にない相手をつけ回すタイプのストーカーの中には被愛妄想 (エロトマニア) を抱いている者がいるが、ここにも「自己否定」の拒絶と現実の否認

や歪曲が見られる。とりわけ、「クレランボー症候群（Syndrome de Clérambault）」においては、その仕方が巧妙である。犯罪者の精神鑑定に当たっていたクレランボーにより、被愛妄想は「純粋型」と、他の精神疾患を併せ持つ「混合型」に分けられており、後に「クレランボー症候群」と呼ばれるようになったのは、その「純粋型」である¹⁶。これは現在の精神医学では妄想性障害の中の被愛型（エロトマニア型）にあたっているが¹⁷、本稿では基本的にクレランボー自身の学説に従って述べる。

患者たちに自分の妄想を隠蔽する傾向があることを発見したクレランボーは、犯罪者にこの妄想症があることを探り出すための診断基準となる基本的公準（Postulat fondamental）を提示した。それは、「愛し始めたのは相手の方で、相手の方がより深く、あるいは相手だけが愛している（原注：古典的観念では、対象は社会的地位が高いのが通例である¹⁸）」（Clérambault 1921 (a)）という患者の言表である。「相手だけが恋愛感情をもっている」という思い込みは、妄想性障害の中心的な防衛機制である投影（projection）によるものであり¹⁹、妄想者は後ろめたい欲求や感情を自己のうちに認めることを忌避し、それを相手が自分に対してもっていると錯覚する。妄想はある日突然始まり、患者の認識では相手との間で「間接的な対話」が成立っており、「相手自身よりも相手の本心を分かっている」（ibid.）。妄想の主な源泉は「恋（amour）」や「情熱（passion）」ではなく、むしろ性的な「思い上がり（orgueil）」である（Clérambault 1920; 1921 (a); 武正 1994, p. 165; Enoch & Trethowan 1982, pp. 48-49; Enoch & Ball 2001, p. 41）²⁰。クレランボーによれば、患者は自分が相手の心を占有し、相手を性的に支配していると確信していても（Clérambault 1921 (c)）、自分の恋愛感情については、表向きには否定するのが通例である（Clérambault 1921

(b)）。患者たちは狡猾で隠蔽的である（Clérambault 1923 (a)）。彼らは他人がどう判断するかを知っており、自分が尤もらしく見える仕方を心得ているので、うっかり本心を洩らすようにさせるには、彼らを操ったり、気をそそったり、ゆさぶったり、苛立たせたりして、策に乗せなくてはならない（Clérambault 1921 (a); 1921 (b); 1923 (a)）。ゾーナらも、純粋型エロトマニアは、しばしば自分の妄想を秘密にしていると指摘している（Zona, Sharma, and Lane 1993, p. 895; cf. Orion 1997, p. 62）。

自分の恋愛感情の否定や妄想の隠蔽は、相手からの拒絶を回避しようとする態度としては尤もで、ここから一般に、被愛妄想者がプラトニックな関係を求める傾向にあることも理解し得るだろう²¹。純粋型のエロトマニアは自分が相手から拒絶されることや、実際に相手と親密な関係になることに恐れを抱いているため、セックス面においても感情面においても、相手と関係を持ちたいという欲求は、その恐れによって相殺されている（Mullen, Pathé and Purcell 2009, p. 105）。「エロトマニアは、恋愛の親密さに対する最も根源的な防御の一つである」（Nacht et Racamier 1958, p. 490）。純粋型のエロトマニアは、手紙などの間接的な接触を好む一方で、面と向かっての接触は避けようとする（Zona, Sharma, and Lane 1993, pp. 900-901; Orion 1997, pp. 33, 69-71）。このような患者にとって重要なのは、自分が理想化する相手からの求愛により自分の価値が高まったと感ずることであり、その充実感は、まさに相手が手の届かない存在であることによって安全に保たれるのである。

この奇妙に用心深い妄想は、それが向けられている対象にとっては決して安全なものではない。クレランボーによれば、この妄想は「期待（espoir）」「悔しさ（dépit）」「怨恨（rancune）」という三つの段階を経て発展する（Clérambault

1921 (a); cf. Clérambault 1920)。患者は徐々に相手からの忌避や嫌悪といった否定的な態度に直面せざるを得なくなり、ナルシズムが傷つけられることになる。「悔しさ」以降の段階においても、相手と特別な関係にあるという患者の誤った確信は修正不能であり、相手の拒絶はすべて、自分への愛の未熟な裏返しとして解釈されるため、恋愛妄想は醜悪で闘争的な方向に発展していく。しばしば患者は自分が相手から被害を受けていると感じ、相手に対する支配を取り戻そうとして、妄想に基づく暴言や中傷、脅迫等の攻撃を行う²²。

この妄想に目立っているのは、現実の事実と「自己否定」に対する回避や拒絶である。被愛妄想者は自己の実像から目を背け、誇大な自己の幻想を守るために、現実が突き付けてくるものを回避し、最後は現実の方を書き換えるための行動に出る。

(4) 自己愛性パーソナリティ障害者における認識の歪みと攻撃性

ミロンは自己愛性パーソナリティ障害者の認知形式を次のように記している。「大抵の場合、自己愛的な人は節操のない空想を抱いており、成功や美やロマンスに関する未熟で自惚れたファンタジーに占有されているように見える。自己愛者たちは妄想的ではないが、現実からの制約を受けることが極めて少ない。彼らはまた事実の束縛を受けず、自己価値の幻想 (illusion) を回復させるためには、事実を粉飾し、嘘さえつく。自己愛者たちの認識は誇大で、自分のファンタジーにも合理化 (rationalization) にもほとんど限界を設けない。彼らは自分の力を大げさに語り、失敗した話を容易く成功譚に作り変え、彼等の自己価値を膨張させ、自分の権利だと信じ込んでいるものを正当化する合理化を、長々と複雑に組み立てる傾向がある。そして、彼らの自己イメージを受け入れたら高め

たりすることを拒む人々の価値を直ちに切り下げる」(Millon 2000, p. 84)。

マスターソンも、自己愛性パーソナリティ障害者がナルシスティックな自己イメージと矛盾する現実を避けたり、否認したり、過小評価したりして、現実を歪曲することを指摘している²³。自己愛者においては、「世界は自分が思うままに利益を引き出せるもので、自分を中心に回っているというファンタジーが維持される。この幻想を守るために、彼はこの自己愛的な誇大な自己投影に適合あるいは共鳴しない現実の知覚を、回避 (avoidance) や否認 (denial) や脱価値化 (devaluation) によって封印しなくてはならない。その結果、彼は現実への適応を犠牲にせざるを得なくなる。これは現実の大半が否認される以上避けられないことである」(Masterson 1981, p. 13)。

マスターソンによれば、「自己愛性パーソナリティ障害者は誇大な自己イメージをもっているが、その事実を認識することができない」(ibid. p. 31)。つまり、自分の実像を受け入れられず、ナルシスティックな自己イメージを保とうとして、現実の等身大の自分から目を逸らすということである。そして、自己の幻想に矛盾する現実を突き付けてくる他者に対して攻撃的になる。クーパーは、自分の能力の欠陥を認識させられる事態に直面したときの防衛反応は、あからさまな憤怒や攻撃性か、自己主張の抑制や顕著な臆病さ²⁴のいずれかだとしている (Cooper 2000, p. 58)。

彼らはまた、自己自身の攻撃行動についても、その有害性を認めることができない。「誇大自己は、対象関係や究極的な真の自己利益を損なう事柄を理解できない。[...] 現在の行動の有害性に直面させられることは、攻撃として体験されることであり、最初の現実の出来事と同様に、患者は、否認、脱価値化、回避などにより防衛せざるを得ない」(Masterson 1981, p. 31)。

(5) 「邪悪な人々」

ベックの考えによれば、人間の悪の心理学的問題の本質は、ある種のナルシズムにある (Peck 1990, p. 86)。ベックが「邪悪」とする人々は、犯罪者でもなければ、精神科を訪れる患者でもない。彼らは、心理療法の患者になることを最も避けたがる人々であり (*ibid.* p. 86; cf. p. 73)、その特徴は「彼ら自身のナルシズムによって、自分には何も悪いところはなく、自分は心理的に完全な人間の見本だと信じている」という点にある (*ibid.* p. 137)。ベックは彼らを自己愛性パーソナリティ障害の一つの変種として分類するのが妥当だとしている (*ibid.* p. 145)。彼らは完全性という自己イメージを守るために、外見上の道徳的清廉性を維持しようと努めている (*ibid.* p. 84)。しばしば高い社会的信用を獲得し維持しようと人一倍努力し、奮闘し、ステータスを得るためであれば、熱意をもって大きな困難に取り組むこともある。

彼らが耐えることのできない唯一の苦痛は、「彼ら自身の良心の苦痛」、「自分の罪深さや不完全性に気づくことの苦痛」である (*ibid.* p. 86)。彼らは、「自責の念——つまり、自分の罪や欠点、不完全性に対する苦痛に満ちた認識——に苦しむことを拒否し、投影 (projection) や罪の転嫁 (scapegoating) によって自分の苦痛を他者に負わせる」 (*ibid.* p. 140)。健全な人においては、失敗は内省と自己批判を促すものとなるが、邪悪な人間においては、失敗は誇りを傷つけるものでしかない。「邪悪な人間は自己批判に耐えることができないため、彼らが何らかの仕方では攻撃に出るのは自分が失敗したときである」 (*ibid.* p. 259)。ベックの指摘によれば、悪は脅威にさらされたナルシズムという条件から生れる (*ibid.* p. 271)。「強度にナルシスティックな (邪悪な) 人間は、自己の完全性のイメージをおびやかす相手は誰であろうと

破滅させようとする攻撃に出る」 (*ibid.*)。「彼らは、自己自身の不完全性を認識できないため、他者を非難することによって自己の瑕疵の言い逃れをしなくてはならない。また、必要とあれば正義の名において他者を破滅させることさえする」 (*ibid.* pp. 292-293)。

「邪悪性の本質的な要素は、罪悪や不完全性に対する意識の欠如ではなく、そうした意識に耐えようとしなくてよいことである。[...] 邪悪性は罪悪感の欠如から生じるのではなく、罪悪感を逃れようとするところから生じる」 (*ibid.* p. 85)。彼らは自己自身の真の姿を見ることを何よりも恐れている。「邪悪な人間は、光を嫌う。彼らを照らし出す善の光、彼らを曝け出す精察の光、彼らの欺瞞を見抜く真実の光を」 (*ibid.* p. 86)。

3. 結論

(1) 「自己否定即自己肯定」の機能不全としてのハラスメントと暴力

以上で見てきたように、諸々のハラスメントや暴力の加害者、病的・変質的な自己愛者、ベックが「邪悪」とする性格の持ち主等は「自己否定」を絶対的に拒絶し、「自己否定」を迫る現実の事実の方を歪め、他者を攻撃する。即ち、彼らにおいては「自己否定即自己肯定」の働きの決定的に停止している。彼らが熱望するのは偽りの自己の自己肯定であり、自己の不完全性、劣悪性、罪悪といったものから目を背けるために、それらを他者に投影する。自己の劣悪性に直面させられそうになると、他者を悪者に仕立て上げて攻撃する。自己の攻撃の不当性からも目を背け、事実を歪曲した自己正当化を行う。被害者が身を守ろうとして抵抗すると、それを自分への反抗や攻撃とみなし、正反対に歪んだ認識を一層強化して被害者に「復讐」しようとする。彼らにおいては、事実を事実とし

て見ることへの強い拒絶があり、それが善を遠ざけ、邪悪な行動に駆り立てている。既述のとおり、「自己否定」ができないために「死即生/自己否定即自己肯定」の運動が停止してしまうのは、精神の死物化である。そこには変化も成長もない。イルゴイエヌは、〈自己愛的な変質者〉は実体がなく、本当の意味では生きていないと指摘している²⁵。

ハラスメントの一般的な特徴は、加害者が自らの悪事を上回るのに十分な罪を被害者に転嫁し、「悪者」を懲らしめているつもりで、被害者に容赦のない攻撃を加え続けるところにある。そのため、被害者が身を守ろうとするだけでも、加害者は理不尽な攻撃をエスカレートさせるのであり、これが所謂「喧嘩」や「トラブル」と異なるハラスメントの特異性だと言えるであろう。

なお、本稿では論じきれないが、同様の仕方で自己正当化しつつ行われる破壊的で支配的な攻撃は、個人レベルだけでなく、集団レベルでも国家レベルでも行われている。この種の攻撃者たちが自己の偽りの正当性を人々に受け入れさせることができると、虚偽も現実的な力をもって社会を支配してしまうことになる。

(2) 被害者における状況と精神の回復

こうした攻撃を受ける被害者においてもまた、「死即生/自己否定即自己肯定」という自己構造が傷付けられる。被害者が加害者の人格を尊重し、少しでもその言い分に耳を傾けるなら、事実を正反対に歪曲する話に引きずり込まれ、混乱させられ、心理的な操作を受けることになる。DVの被害者は加害者から常々非難されているため、自分に落ち度があつて加害者を怒らせ、攻撃されなければならなくなっていると思込まされているし (cf. 小西 2001, pp. 106-107)、モラル・ハラスメントの被害者も、考えられない仕方で自分に加えられた暴力の理

由が分からず、自分が悪くてそのような目に遭ったと感じている (Hirigoyen 1998, pp. 157-158, 195; Hirigoyen 2004, p. 250)。全く不可解なやり方で人間の尊厳を踏みにじられた被害者は、加害者が表立って主張するとおりに、自分の価値の低さがそれを引き起こしたと錯覚してしまう。加害者の責任転嫁の仕方が巧妙であればあるほど、被害者は相手の問題を自分の問題として引き受けてしまう。これらの被害者たちは、絶えず事実に基づかない「自己否定」に陥らされているため、本来の健全な「自己否定即自己肯定」を行うことができなくなっている。イルゴイエヌによれば、モラル・ハラスメントは「精神的な殺人」(Hirigoyen 2004, p. 144)である。心理操作や虐待を受けたことによる「自己否定」は、「死即生」とはならない人格の「死」をもたらすことになる。

レイプや児童期の性虐待だけでなく、モラル・ハラスメント、DV、ストーキング、セクハラにおいても、とりわけ被害が深刻である場合、被害者は心的外傷後ストレス障害 (PTSD) を患う²⁶。外傷反応が起こるのは、被害者が結果的に身を守れず、抵抗も逃走も不可能だったような場合である (Herman 1992, p. 34)。

PTSD患者においては、正常な自己感覚、信頼に基づく人間関係、および世界理解が崩壊する。ハーマンによれば、「外傷的事件は他者との関係において形成され維持されている自己の構造を粉碎する。それは、人間の経験に意味を与える信念体系を傷つける。現実世界の秩序や神の秩序に対する被害者の信念を汚し、実存の危機に被害者を投げ入れる」(ibid. p. 51)。それは「世界が安全なところだという基礎的な前提³¹、自己の積極的価値、および創造された世界の意味のある秩序を破壊する」(ibid.)。PTSDは人間の实存そのものに関わる障害であり、それは患者の「内」からではなく、外傷体験によって突如「外」からもたらされる。「外

傷を受けた人々は自己の基礎構造にダメージを被る。彼らは自己自身への信頼を失い、他者への信頼を失い、神への信頼を失う。彼らの自尊心は、屈辱感や罪悪感、無力感の体験によって打撃を受ける。人との親密性を受け入れる彼らの能力は、必要と恐怖という矛盾する激しい感情によって危うくされる。彼らが外傷以前に形成していたアイデンティティは取り返しがつかないほど破壊される」（*ibid.* p. 56）。これは「自己喪失（loss of self）」（*ibid.*）の状態であり、「信頼が失われた時、外傷を受けた人々は自分が生者よりも死者の方に属していると感じる」（*ibid.* p. 52）。

更にPTSDにおいては、外傷体験の時点で時間までもが凍り付いて停止し、現在も未来も失われてしまう²⁷。西田は自己と時間とを不可分のものとして見ており、「自己のある所、そこが現在であり、現在のある所、そこに自己がある」（五・244）と述べている²⁸。こうした観点からは、深刻なPTSDをもたらし外傷体験の一つの特徴を、正常な自己構造と正常な時間構造との両方を破壊するという点に見ることもできるだろう。

（3）まとめ

こうして諸々のハラスメントにおいては、加害者側の精神に「死即生/自己否定即自己肯定」の機能不全が起こっていると言えるが、被害者側には本来は健全に機能していたこの構造が破壊されるという事態が起こっている。事実即した「自己否定」の拒絶も、心理的な混乱による「自己否定」も、次の正常な「自己肯定」をもたらしさない。しばしば被害者たちは、自己正当化を行う加害者から責任を転嫁され、自分でも被害を避けられなかった自己の無力を恥じ²⁹、第三者からも被害者に落ち度があるという目で見られる。しかし既述のように、加害者たちの思考や行動のパターンは正常者の常識では想像

や判断ができるものではない。被害を防げなかったとしても、それは被害者に常識がなかったせいではなく、むしろ常識で判断して行動したせいである。そしてこれこそが、被害者の正常な世界観や自己感覚が破壊され、一切の信頼感が崩れ去ることになった原因でもある。

心理操作や心的外傷を受けることで引き起こされる被害者の「自己否定」は間違っただけであり、加害者側の「自己否定」の拒絶を、被害者側が引き受けてしまった結果である。「セラピストは被害者の罪悪感を取り除く手助けをしなければならぬ。外部から加えられた攻撃を認識し、被害者が加害者の変質的な奸計を解明するのを助けなければならない」（Hirigoyen 2004, pp. 250-251）³⁰。そうした事実の分析や理解は、被害者における不当で破壊的な「自己否定」を、正当な「自己肯定」へと向けかえるだろう。

「トラウマを生き延びた被害者は、人格を再構成し、周囲の世界とそれまでとは違った関係をもつようになる。トラウマは消えることのない傷跡を残すが、被害者はその上に自己を再構築することができる。人生におけるこうした辛い体験は、自己変革の絶好の機会となることが多く、被害者はより強く、よりしたたかになってそこから抜け出す」（Hirigoyen 1998, p. 199）。それまでの人生観や世界観で処理できない出来事が起こったということは、人生観や世界観のグレードアップが求められていることだとも言える。心的外傷による「自己否定」は自己の「内」から起こる本来の「自己否定」ではなく、外部から自己が壊される体験ではあるが、それでも外傷体験が適切に処理されれば、心的外傷後成長（Post traumatic Growth）としての「自己肯定」をもたらし得るのである。

注

1 「物が我を動かしたのでもよし、我が物を動かした

- のでもよい。雪舟が自然を描いたものでもよし、自然が雪舟を通して自己を描いたものでもよい」(一・125)。
- 2 たとえばプロティノスも、「一者との合一」には自己放下が必要だとしている。「他のすべてを捨て去り、ただこのもの(一者)の内のみ立ち止まり、我々が身にまとっている他のすべてのものを断ち切って、ただこのもの(一者)とならなければならない」(VI9[9]9.50-52; cf. V3[49]9.3-8)。ただし、プロティノスにおける「一者との合一」は、いわば静止状態における「合一」であるが、西田の「神人合一」は活動における相即性とも言うべきものである(岡野 2020を参照)。西田は、「この統一其者は知識の対象となることはできぬ、我々は此者となつて働くことはできるが、之を知ることはできぬ」(一・146)と述べている。
 - 3 自己のこうした統一作用は、現在意識そのものである。西田は現在意識があるところに自己があると指摘している。「現在が現在自身を限定すると考へられる所、そこにいつも我々の自己と考へるものがあるのである」(五・207)。過去の自己や未来の自己は対象化されて捉えられたものにすぎない。過去の自己を想起し、未来の自己を予想するのは自己の現在の意識であり、かえってこの意識こそが我々の自己だと言わなくてはならない。我々の真の自己とは対象化されて見られた自己ではなく、「この現在の能動的自我」(二・197)であり、「絶対現在」の瞬間的自己限定として行為する自己である。注28も参照。
 - 4 「絶対に対立するものの相互関係は互いに反響し合ふ、即ち応答するといふことでなければならない。何処までも独立に自己自身を限定するものが、自己自身の尖端において相結合するのが応答といふことである、そこには所謂自他合一と正反対の意味がなければならない」(五・307)。「自己の底に絶対の他を認めることによつて内から無媒介的に他に移り行くといふことは、単に無差別的に自他合一するといふ意味ではない、却つて絶対の他を媒介として汝と私とが結合するといふことでなければならない。自己が自己自身の底に自己の根柢として絶対の他を見るといふことによつて自己が他の内に没し去る、即ち私が他に於て私自身を失ふ、之と共に汝も亦この他に於て汝自身を失はなければならない、私はこの他に於て汝の呼声を、汝はこの他に於て私の呼声を聞くといふことができる」(五・310-311)。
 - 5 『善の研究』では、「純粹経験」が「事実其儘の状態」なのであった。「経験するといふのは事実其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄て、事実に従うて知るのである。純粹といふのは、普通に経験といつて居る者も其実は何等かの思想を交へて居るから、毫も思慮分別を加へない、真に経験其儘の状態をいふのである」(一・9)。「いかなる意識があつても、それが厳密なる統一の状態にある間は、いつでも純粹経験である、即ち単に事実である」(一・14)。「純粹経験」は、「意識上における事実の直覚」(一・42)である。
 - 6 「個物と世界との即ち多と一との矛盾的自己同一として事実が事実自身を限定する所に、我々の自己が成立するのである。これは歴史的世界成立の事実であると共に、我々の自己成立の事実でなければならない。我々の自己は、そこから生れるのである。私が嘗て我々の自己を絶対的一者の自己射影点と云つたのも、之によるのである。我々が何としても認めなければならない、我々の疑ふことのできない事実と云ふのは、我々の自己がそこから成立する事実であるのである」(九・382)。
 - 7 「理性によつて否定すべきものは現実ではなくして、我々の主観的独断でなければならない、ドクサでなければならない」(九・175)。
 - 8 「現実の世界とは単に我々に対して立つのみならず、我々が之に於て生れ之に於て働き之に於て死にゆく世界でなければならない」(六・171)。
 - 9 「活きた者は皆無限の対立を含んでいる、即ち無限の変化を生ずる能力をもつたものである。精神を活物というのは始終無限の対立を存し、停止する所がない故である。若しこれが一状態に固定して更に他の対立に移る能わざる時は死物である」(一・58)。「我々は何処までも個人的限定に生きんとする時、それは畢竟我々を死に導くの外はない」(八・60)。
 - 10 Hirigoyen (1998, pp. 128-129) ; Mullen, Pathé and Purcell (2009, p. 70) ; 福島 (1997, pp. 113-119) ; 町沢 (2013, p. 95) を参照。
 - 11 ハーマンも『心的外傷と回復』の中で、「犯人には自分の犯罪を正当化したいという心理的要求があるようだ。このため、犯人は被害者からの肯定を必要とする」(Herman 1992, p. 75) と述べている。
 - 12 イルゴイエヌは「権力の濫用によるハラスメント」(Hirigoyen 1998, pp. 70-73) と、加害者が「自己愛的な変質者」である場合とを区別し、後者を「モラル・ハラスメント」とし、前者を「モラル・ハラスメントに似ているが、そうではないもの」としている (cf. Hirigoyen 2004, pp. 22-24, 210-220)。日本のいわゆる「パワハラ」は前者に当たると言つて良いだろう。
 - 13 「自己愛的な変質者」という概念を最初に提示した精神分析医のひとりP=C・ラカミエであり、続

- いてアルベルト・エイゲルがそれを、誇大な自己の影響のもとに、相手が自分に脅威を与えないように、その健全な自己愛を打ち砕こうとする人間として定義した（Hirigoyen 1998, p.127）。
- 14 ヤングとフラナガンによれば、自己愛者が治療を求めるのは、ある人間関係が破綻したり、仕事を失ったりしたあげく、人生に裏切られたと感じて落ち込む時である。いずれにしても、自己愛者が問題を自ら認めることはほとんどなく、破綻した人間関係にある相手や、人生や運など何かが非難の対象になっている（Young & Glanagan 2000, p. 250）。
 - 15 ストーカーのタイプの中では最も多い（小早川 2017, p. 50）。「拒絶型ストーカー」には、ドメスティック・バイオレンス（DV）が先行していることも多い（cf. Mullen, Pathé and Purcell 2009, pp. 27, 58-59, 75）。
 - 16 Arieti (1959, p. 551) ; 小泉 (2015, p. 225) ; 小泉 (2010, p. 62) を参照。Enoch & Trethowan 共著『興味ある精神症候群』（1982, p. 23; 及び Enoch & Ball 2001, p. 34）もエロトマニアの「純粋型」を「クレランボー症候群」としているが、Enochらはクレランボーによる「基本条件 fundamental postulate」として、クレランボー自身の記述とは異なる内容を記載している（Enoch & Trethowan 1982, p. 23; Enoch & Ball 2001, p. 20）。
 - 17 『カプラン臨床精神医学テキスト：DSM-5診断基準の臨床への展開』第3版，2016年，Chapt. 7. 4, p. 377を参照。西丸四方，西丸甫夫（2006, p. 122）も、パラノイア（偏執病）の色情性のものを「クレランボー症候群」としている。Zona, Sharma, and Lane (1993, pp. 894-895) も参照。
 - 18 ナルシスティックな切望を持つ被愛妄想者は、彼ら自身の誇大性を増進させるために、理想化された対象と同類であろうとする（Meloy 1989, p. 482）。被愛妄想者の心中における理想的自己と理想の対象との融合の追求は、誇大的自己構造の防衛的固定化と考えられる（Meloy 1989, p. 483）。この心理は、「拒絶型」のストーカーにもあることが指摘されている（福井 2014, p. 22）。
 - 19 Hart (1921, p. 121)、及び Meloy (1989, p. 486)。『カプラン臨床精神医学テキスト：DSM-5診断基準の臨床への展開』第3版，2016年，Chapt. 7. 4, p. 373も参照。
 - 20 ナルシズムはエロトマニア型妄想を形成する重要な役割を担っていると Reik (1963) に言及しながら、Meloy (1989, pp. 483-484) や Enoch & Ball (2001, p. 40) もまたエロトマニアにおける自己愛的な特徴を指摘している。
 - 21 クラフト＝エビング (1879) 以来、多くの専門家たちが指摘しているエロトマニア妄想の特徴は、相手との間のプラトニックな関係である。だが、クレランボーによればプラトニズムは本質的なものではなく、患者の小心さに基づく副次的な要素に過ぎず（Clérambault 1920）、患者の性格によっては肉体関係を求めるケースがある。それは、たとえば患者のもともとの性格において「性愛（érotisme）」が「思い上がり（orgueil）」にまざっているような場合である（Clérambault 1923）。なお、「愛（amour）」に比べて「思い上がり」の要素が明らかに少ない患者のケースでは、妄想の対象に悪意のある攻撃は行われず、妄想が「怨恨」の段階へと発展しないまま長期化している（cf. *ibid.*）。
 - 22 全ての妄想はクレランボーが公準として示した最初の唯一の母胎観念（*idée-mère*）から発展しているため、その一点が壊れれば長大な妄想の全体系が崩れ去るのだが、妄想者がそれを許すことは実際にはあり得ない（Clérambault 1921 (a)）。
 - 23 ある自己愛性パーソナリティ障害患者が次のように述べている。「もし現実が僕の望むようなものでなかったら、僕の望むようなものにします。本当はあるがままの現実を受け入れることを学ぶべきなんでしょう。でも、そんなことは嫌です。気が滅入ってしまいます」（Masterson 1981, p. 79）。
 - 24 潜在型（過敏型）の自己愛性パーソナリティ障害者は他者の反応にひどく過敏で、ナルシズムが傷付けられる可能性を恐れて人目に立つことを避ける。彼らの誇大性は目立たないもので、自分是他者から特別な待遇を受ける権利があると確信するという形をとる（Gabbard 2000, p. 130）。
 - 25 「中身が空虚なナルシストは、まるで吸血鬼のように他者の実体を食い物にすることを必要とする。自分に生命がないのであれば、他者の生命を我がものにしないでなければならない。あるいはもしそれが不可能なら、どこにも生命が存在しなくなるように、他者の生命を破壊しなくてはならない」（Hirigoyen 1998, p. 130）。
 - 26 モラル・ハラスメントの被害者については Hirigoyen (1998, pp. 169-171)、DV被害者については小西 (2001, pp. 145-147) および内閣府男女共同参画局のHP「ドメスティック・バイオレンス（DV）とは」、ストーキング被害者については Mullen, Pathé and Purcell (2009, pp. 54-56)、セクハラ被害者における PTSD と複雑性 PTSD については NPO 法人日本フェミニストカウンセリング学会 2019 (pp. 41-49) を参照。
 - 27 外傷的記憶は「ことばを持たずに凍り付いている」（Herman 1992, p. 37）。「時間感覚の歪みといった症状を引き起こすこともある。記憶充進によるかのように、心的外傷となった出来事のところで時間

が止まり、現在のことが非現実になる」(Hirigoyen 2004, p. 137)。

- 28 注3を参照。西田の時間論によれば、時の構造自体が「死即生/自己否定即自己肯定」である。「時の尖端は一瞬一瞬に消え行くもの」(五・145)であり、この瞬間が次の瞬間に移り行くのは「自己自身の底深く秘められた自己否定によって」(五・298)である。そこで、この瞬間と次の瞬間とは否定を介して連続するのであり、時は「非連続の連続」(五・208, 217, 219, 268, 346)だということになる。時間上の各瞬間を結合する法則は、「自己自身を否定することによって自己自身を肯定するといふこと」、「死することによって生きるといふこと」でなければならない(五・218)。現在の瞬間が否定されている「現在の底は絶対の無」(五・112)であり、「絶対に無なるものの自己限定」(五・112, 217)、「絶対無の自覚的限定」(五・147)として時間上に各瞬間が生じてくる。そしてこのすべての瞬間を限定する「絶対に無なるもの」は、「絶対現在」や「永遠の今」という表現でも述べられる(五・148)。「時は永遠の今の自己限定として成立する」(ibid.)。

ところが、PTSD患者における時の流れは、「絶対無の自己限定」としての正常な時ではない。一瞬一瞬が「絶対無」ではなく、過去の「外傷体験」へと不可避的に引き戻されてしまい、それが「絶対現在」や「永遠の今」の位置を占め、いわば「外傷体験の自己限定」として恐怖を引き摺った時が繰り返されていく。

- 29 「被害者がいかに勇敢で機知に富んだ人であっても、その行動は災難をかわすのに不十分だったのである。外傷的イベントの余波期において、被害者が自分の行いを反省して評価する際、罪悪感と劣等感とはほとんどあらゆるところに及んでしまう」(Herman 1992, p. 53)。
- 30 レイプの被害者たちは「後になって自分は『バカだった』『ナイーブだった』と狂ったように自己を批判する。この厳しい自己非難を現実にもとづいた評価に変えることは実際に回復力を高める」(Herman 1992, p. 69)。本稿では立ち入ることができなかったが、性被害だけでなく、DVや諸々のハラスメントの被害者たちが逃げるができなかったことにも、普通は尤もな理由がある。物理的な力に対する恐怖にかぎらず、経済的、社会的、心理的、法的従属などによる精神的な「監禁状態」におかれているといった理由である (cf. *ibid.* ch. 4)。また、本稿で概略は示したが、加害者たちは相手からの抵抗や拒絶、反撃を防ぐことに異常な工夫を凝らし、力を尽くしている。

凡例

西田のテキストは、新版『西田幾多郎全集』(東京: 岩波書店, 全二十四巻、2002 - 2009年)を用い、巻数を漢数字で、頁数をアラビア数字で示す。

参考文献

- Arieti, S.; Meth, J. M. (1959) . "Rare, Unclassifiable, Collective, and Exotic Psychotic Syndromes" , in *American Handbook of Psychiatry*, vol. 1. Arieti S (ed.). New York: Basic Books, 546-563.
- Bancroft, L. (2002) . *Why Does He Do That?: Inside the Minds of Angry and Controlling Men*, New York: Putnam's Sons (ランディ・バンクロフト『DV・虐待加害者の実体を知る—あなた自身の人生を取り戻すためのガイド—』, 高橋睦子・中島幸子・山口のり子 [監訳], 明石書店, 2008年) .
- Clérambault, G. (de); Brousseau (1920) . "Coexistence de deux délires: Persécution et Érotomanie (Présentation de malade)" , *Bul. Soc. Clin. Méd. Ment.*, déc., 238 (G. ドゥ・クレランボー『熱情精神病』, 木村敏夫・時澤哲也・関忠盛・山岸一夫訳, 金剛出版, 1984年, 31-52) .
- Clérambault, G. (de) (1921 (a)) . "Les délires passionnels. Érotomanie, Revendication, Jalousie (Présentation de malade)" , *Bul. Soc. Clin. Méd. Ment.*, fév., 61 (G. ドゥ・クレランボー, 1984年, 53-66) .
- (1921 (b)) . "Érotomanie pure. Érotomanie associée (Présentation de malade)" , *Bul. Soc. Clin. Méd. Ment.*, juil., 230 (G. ドゥ・クレランボー, 1984年, 67-102) .
- (1921 (c)) . "Dépit érotomaniaque après possession (Communication)" , *Bul. Soc. Clin. Méd. Ment.*, juin, 175 (G. ドゥ・クレランボー, 1984年, 107-159) .
- Clérambault, G. (de); Lamache (1923) . "Érotomanie pure persistant depuis 37 années (Présentation de malade)" , *Bul. Soc. Clin. Méd. Ment.*, juin., 192 (G. ドゥ・クレランボー, 1984年, 163-173) .
- Cooper, A.M. (2000) . "Further Developments in the Clinical Diagnosis of Narcissistic Personality Disorder" , in Ronningstam, E. F. (ed.), 53-74.
- Enoch, M. D. and Ball, H. N. (2001) . *Uncommon Psychiatric Syndromes*, Fourth Edition, London/New York/New Delhi: Arnold, a member of the Hodder Headline Group.
- Enoch, M. D. and Trethowan, W. H. (1982) . 『興味ある精神症状群』, 宮岸勉監訳, 医学書院.
- 福井裕輝 (2014). 『ストーカー病—歪んだ妄想の暴走は止まらない—「恨みの中毒症状」の治療なしに被害者は減らせない』, 光文社.
- 福島章 (1997) . 『ストーカーの心理学』, PHP新書.
- Gabbard, G.O. (2000) . "Transference and Countertransference in the Treatment of Narcissistic Patients" , in Ronningstam,

- E. F. (ed.), 125-145.
- Hart, B. (1921) . *The Psychology of Insanity*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Herman, J. L. (1992) . *Trauma and Recovery*, Basic Books, New York (ジュディス・L・ハーマン『心的外傷と回復』, 中井久夫訳, 小西聖子解説, みすず書房, 1996年) .
- Hirigoyen, M.-F. (1998) . *Le Harcèlement moral: La violence perverse au quotidien*, Éditions La Découverte et Syros, Paris (マリー＝フランス・イルゴイエンス, 『モラル・ハラスメント—人を傷つけずにはられない—』, 高野優訳, 紀伊國屋書店, 1999年) .
- (2004) . *Malaise dans le Travail, Harcèlement moral: démêler le vrai du faux*, Éditions La Découverte, Paris (Éditions La Découverte et Syros 2001; マリー＝フランス・イルゴイエンス『モラル・ハラスメントが人も社会もダメにする』, 高野優訳, 紀伊國屋書店, 2003年) .
- 小泉明 (2010) . 「de Clérambault 症候群」, 『分子精神医学』, Vol.10, No.1, 62-65.
- (2015) . 「de Clérambault 症候群」『臨床精神医学』 44 (2), 223-232.
- 小西聖子 (2001) . 『ドメスティック・バイオレンス』, 白水社.
- 小早川明子 (2017) . 『ストーカー —「普通の人」がなぜ豹変するのか』, 中公新書ラクレ.
- Masterson, J. F. (1981) . *The Narcissistic and Borderline Disorders*, Brunner-Routledge, New York & London (ジェームス・F・マスターソン『自己愛と境界例—発達理論に基づく統合的アプローチ』, 富山幸佑, 尾崎新訳, 星和書店, 1990年) .
- 町沢静夫『自己愛性人格障害』, 駿河台出版社, 2013年.
- Meloy, J. R. (1989) . “Unrequited Love and the Wish to Kill: Diagnosis and Treatment of Borderline Erotomania” , *Bulletin of the Menninger Clinic*, Vol. 53, No. 6, The Menninger Foundation, 477-492.
- Millon, T. (2000) . “DSM Narcissistic Personality Disorder: Historical Reflections and Future Directions”, in Ronningstam, E. F. (ed.), 75-101.
- 守山正 (編著) . (2019) . 『ストーキングの現状と対策』, 成文堂.
- Mullen, P. E.; Pathé, M. and Purcell, R. (2009) . *Stalkers and their victims*, Second Edition, Cambridge University Press.
- Nacht, S. et Racamier, P. C. (1958) . “La théorie psychanalytique du délire” , *Revue Française de psychanalyse*, vol. 22, n° 4-5, 417-574.
- 西丸四方, 西丸甫夫共 (2006) . 『精神医学入門』(改訂25版), 南山堂.
- 日本フェミニストカウンセリング学会・性犯罪の被害者心理への理解を広げるための全国調査グループ (2019) . 『なぜ「逃げられない」のか—継続した性暴力の被害者心理と対処行動の実態—』, 財団法人俱進会助成事業.
- 岡野利津子 (2020) . 『プロティノスと西田—西洋的神秘と東洋の日常の根底—』, 学習院大学研究叢書 42, 学習院大学.
- Orion, D. (1997) . *I Know You Really Love Me: A Psychiatrist's Journal of Erotomania, Stalking, and Obsessive Love* (ドリーン・オライオン『エロトマニア妄想症—女性精神科医のストーカー体験—』, 長島水際訳, 朝日新聞社, 1999年) .
- Peck, M. S. (1990) . *People of the Lie: The Hope for Healing Human Evil*, London: Arrow. Books Limited (M.スコット・ベック『平気であそをつく人たち—虚偽と邪悪の心理学—』, 森英明訳, 草思社, 1996年) .
- Ronningstam, E. F. (ed.) . (2000) . *Disorders of Narcissism, Diagnostic Clinical, and Empirical Implications*, Northvale, New Jersey, London: Jason Aronson Inc (Reprinted from the Original Edition of 1998). (エルザ・F・ロニングスタム編『自己愛の障害—診断的、臨床的、経験的意義—』, 佐野信也監訳, 金剛出版, 2003年) .
- Sadock, B. J.; Sadock, V.A.; Ruiz, P. (2015) . *Kaplan and Sadock's Synopsis of Psychiatry: Behavioral Sciences/Clinical Psychiatry*, Wolters Kluwer (ベンジャミン・J.サドック, バー吉ニア・A.サドック, ペドロ・ルイス編著『カプラン臨床精神医学テキスト: DSM-5診断基準の臨床への展開』第3版, 井上令一 監修, メディカルサイエンスインターナショナル, 2016年) .
- 武正建一 (1994) . 「恋愛妄想症候群 (de Clérambault)」『臨床精神医学』 23増刊号, 164-167.
- Young, J., Flanagan, C. (2000) . “Schema-Focused Therapy for Narcissistic Patients” , in Ronningstam, E. F. (ed.), 239-268.
- Zona, M., Sharma, K., and Lane, J. (1993) . “A Comparative Study of Erotomaniac and Obsessional Subjects in a Forensic Sample” , *Journal of Forensic Sciences, JFSCA* 38, 894-903.